風土記

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉 第13号 1994年10月1日

「戸の本」雑感

佐川高等学校教頭　宅間　一之

梅雨は雨を忘れ、灼熱の陽光が地上につきささる暑さの一日、乞われて戸の本を案内することとなった。周辺には住宅建ちならび、兼山開発という長浜川の護岸堤は高く川面は見えない。黒いアスファルトからはメラメラとカゲロウがあがる。この土地の変化は昭和六十年頃より急激であったという。

新しい住宅地の一隅に、白いフェンスに囲まれた戸の本公園がある。中央の石積みの上に建つ古びた碑とその脇の説明板が、ここが史跡であることを教える唯一のものである。

永禄三年五月、土佐中原の龍虎とうたわれた本山氏と長宗我部氏、その両者が興亡を賭した決戦の場。国親の奇襲で本山の支城長浜城が落城したのは永禄三年五月二十六日夜という。朝倉の城で知らせを受けた本山は二千余騎の兵を長浜に向け、千余騎の長宗我部の軍勢に挑んだ。「戸の本の合戦」開始である。背は高く色白、柔和な性格の「姫若子」元親二十二才の初陣であった。鑓の突き方さえ知らず、「敵の目を突け」と家臣秦泉寺豊後に教えられての戦いではあったが、その戦いぶりは一躍「土佐は申すに及ばず、四国の主」となる「土佐の出来人」にのしあがる奮戦であった。

戸の本古戦場、西には北山から南の海辺まで高さ七・八十メートルの山が春野への道をさえぎり、その山裾から一キロほどの東には長浜城があり雪蹊寺はその南麓である。南北の幅は五百メートルあろうか。南にも山があり、その西端を東にまわると若宮八幡宮がある。そこに広がる湿田が三千余の兵相まみえた戦の場であり、まさに戦場という名にふさわしい自然地形である。幼い頃よく詣でた雪蹊寺への春野からの道は、湿田のほぼ中央部を流れる長浜川を掘りあげた土で作られた堤道であった。道の両側は水田いや当時もまだ湿田であった。あちこちの泉にはさして大きくはない草木が茂り、吹く風に驚いて飛ぶ鳥もいた。その風景に古戦場のにおい粉々たるものがあったと記憶する。だが今はその湿田は埋められ嵩上げされて住宅は並び、車は縦横に走る幅広い道を狭しと競う生活の風景となっている。

公園の一基の碑、古びた石に『古墳也勿毀』と鮮やかに刻まれている。説明板は言う。「戸の本合戦、両軍の戦死者その数を知れず。戦場の露と果てし将兵の亡骸を弔い、御霊を慰め奉らむといつの世か無縁の塚ここに建つ。題して　古墳也勿毀」と、

すぐ近くに老巨木数本の叢林があった。涼を求めてそのもとに腰をおろすと風はかすかに吹いて頬をなで、頭上の蟬は、骨肉相食む戦国の世の語り部となって声をはりあげる。激しい攻防戦は湿田に幾多の屍を埋めた。草むらの陰に聞く傷ついた兵士のうめき声、それも次第に細くなり消えていく。周辺の庶民百姓達の難儀は計り知れず、戦いすんで彼らは静かに犠牲者の霊を弔い慰めあった。

ふと気づく巨木の陰の小さな祠。心誘われつい扉を開くと、中には文字のかすれたお札と五輪の水輪部が一個ころがって里人達の心を伝える。

説明板は続く。「御霊和まり坐し給いて、里の守護、世の鎮めと永久に此の地に斎かれまし給い　土佐魂復性の因とならんことを乞い願う」と。

戸の本を訪れたのは何年ぶりであったろう。滔々たる時流の中で歴史の風景は大きく変えられたが、そこに息づく里人達の歴史によせる想いに変わりはない。そよ風が巨木の枝に語りかけるようにそっと揺すって過ぎていった。

特別展『四国の戦国群像―元親の時代―』によせて

野本　亮

開館三周年事業の特別企画第二弾として、十月十五日（土）より『四国の戦国群像―元親の時代―』を開催する。

土佐の長宗我部氏のみならず、多くの四国の戦国武将は、中世以来の伝統を誇っていたが、天正十三年（一五八五）の太閤軍との戦いや徳川政権誕生時にその基盤を失い、大多数は滅亡した。生きのびた者も四国を去り、一介の侍として他家に仕官したり、在所で帰農するなど、近世を通じてその家名を存続し得た者は稀であった。故に四国各地の支配者層の断絶は、中世というひとつの時代を崩壊させ、四国外からやってきた新領主による近世化を可能にした。

右のように重要な時代でありながら、この時期の企画展はほとんど行われずに現在に至っている。その原因としては、土台となるべき根幹資料が少ないため、軍記物による時代把握が大きいウェイトを占めていることなどがあげられる。

全国には、数少ない文献資料から、創意工夫によって最大限の情報を引き出し、軍記物によって創られた世界に風穴を開けようと頑張っておられる方々がいる。本展では、その方達の研究成果の一部を紹介し、今一度この時代を見直すきっかけにしたい。また、これを契機に埋もれている資料が発掘され、多少なりとも戦国史研究に前進が見られれば嬉しい限りである。

次に、本展の展示構成並びに主要な展示資料を紹介する。

一、戦国時代の土佐

土佐の守護細川京兆家のもとで土佐を支配した守護代田村細川氏と、又代（まただい）的な存在であったと思われる大平氏、公家大名と称された一条氏、有力国人として成長してきた安芸・香宗我部・本山・津野・長宗我部各氏に関する資料を展示する。

・細川勝元禁制　竹林寺蔵
・拾遺和歌集大平氏奥書（P）京都府立総合資料館蔵
・津野定勝書状　吉門直弥氏蔵
・本山茂辰書状　前田元長氏蔵
・安芸国虎書状　長崎義章氏蔵
・一条房家画像　幡多郷土資料館蔵
・長宗我部覚世（国親）書状　[redacted]
・吉田備中守孝頼書状　西内清彦氏蔵

二、元親の係累

元親には、三人の弟と三人の姉妹があり、正室との間に四男四女があったという。ここでは弟の親泰、長男信親、四男盛親、正室の親族などの関係資料をもとに、元親の係累を紹介する。

・伝長宗我部信親所用甲冑　雪蹊寺蔵
＊伝香宗我部親泰所用陣羽織・采配　香宗我部一良氏蔵
・石谷摂津入道書状　真静寺蔵
・長宗我部盛親書状　高知市民図書館蔵

三、元親の家臣団

長宗我部氏の家臣団については、不明瞭な点が多く、全体像を摑むことは困難である。しかし、数千人規模の直臣団がいたことは確実であり、その中の主に中・下級武士の遺品などを展示する。

・伝仁井田五人衆所用具足　高岡神社蔵
・伝西村吉大夫所用甲冑　有友弘子氏蔵
・火縄銃（天正十一年阿州作）　葉山村郷土資料館蔵
・鉄鏃（尾川城跡出土）　土佐神社蔵
・秦氏政事記　高知県立図書館蔵

四、元親の領国経営と文化

ここでは、元親の定めた法令や検地、武将の教養や信仰といったものに焦点をあて、彼らの法的・文化的側面を垣間（かいま）みる。

・長曽（ママ）我部元親百ヶ條　明治大学刑事博物館蔵
・長宗我部地検帳　高知県立図書館蔵
・飛鳥井曽衣書状　一条神社蔵
＊国分寺棟札帳　国分寺蔵
・能面（津野孫次郎寄進）　土佐神社蔵
・棟札（元親・盛親・大中臣基道奉納）　美良布神社蔵
・陣太鼓（伝元親初陣）　若宮八幡宮蔵

五、阿讃予の武将と元親

阿波、讃岐、伊予の武将達を元親との関わりを通じて紹介する。

・三好元長画像　見性寺蔵
・一宮城史跡図　四国大学凌霄文庫蔵
・一宮成相書状　浜秀孝氏蔵
・三好千熊丸・千満丸書状　見性寺蔵
・刀（銘〈裏〉三好左近将監所持也）個人蔵
・阿野弾正少弼通直書状案　西禅寺蔵
・小早川隆景書状　毛利祥允氏蔵
＊香川五郎次郎書状　金子家和氏蔵
・三好義堅（十川存保）書状（複）　高松市歴史資料館蔵
・伝小笠原長政所用陣太鼓　願勝寺蔵

以上が本展の概要である。

九〇数点の展示資料の中には、国の重文、県指定、市町村指定文化財も多く、これを最後に二度と公開される見込みのない資料（長曽（ママ）我部元親百ヶ條など）もあるため、是非この機会に御覧いただきたいものである。

＊一般初公開、（P）写真展示、

（複）複製の意味である。

展示資料の紹介（伝香宗我部親泰遺品）

横浜に香宗我部親泰の遺品があることを知ったのは、香宗我部豁志著「長宗我部直系下の香宗我部氏」（『長宗我部元親のすべて』山本大編）の中の掲載写真を見た時であった。豁志氏によれば、この写真を掲載するまで一般にはほとんど知られていなかったそうである。

長宗我部元親の弟、香宗我部親泰の死後家督を継いだ貞親は、長宗我部家滅亡後、父の形見をもって土佐を出たという。永らく浪人の身であったが、春日局の周旋により堀田家に仕官した。（仙台香宗我部家代々過去帳写・佐倉香宗我部家代々冊子）以後、堀田家重臣として幕末まで家名を保ち、先祖伝来の品々を家宝として相伝してきたのである。現在、東京国立博物館所蔵の『香宗我部家伝証文』はあまりにも有名だが、この四点の資料もたいへん価値あるものといえよう。親泰自身の着領記録はないが、藩主の命で、貞親が天草の乱に出陣する際これを着領した記録がある。

「佐倉香宗我部文書」（香宗我部敬親武器書上牒）

・・略天草一揆の時、後詰の命あり、貞親将として出陣あるべく、江戸浅草の屋敷（今、堀田原という）に人数揃有り、其の時の有様画きて豊前守様（堀田氏）金屏風に仕立、其中に貞親大馬標に背幟して図して有り云々……

とあり、この金屏風の中にこの甲冑が描かれているそうである。また、調査に同行して下さった東京国立博物館の池田主任研究官によれば、安土桃山から江戸初期ぐらいまで溯ることができる名品だという。親泰がこの甲冑を身にまとい、四国の戦場を駆け巡った姿を想像すると、軍記物の世界がにわかに現実味を帯びてくる。

ところで、この甲冑は幾度か修理されている。最近の修理では、昭和三十四年鎧司牧田三郎氏によっておこなわれている。

金茶威　鎧修理　見積書

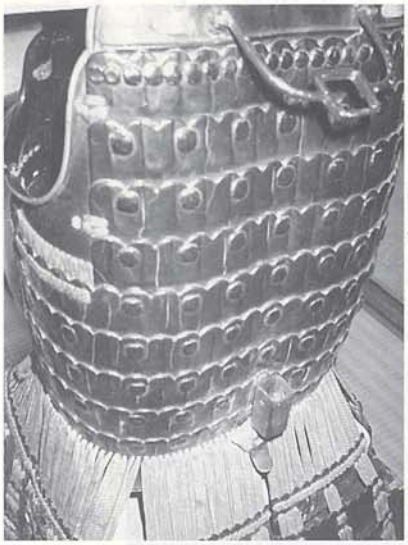
一、修理箇所　胴及ビ草摺威替
　兜ノ縫修理補修　籠手　襠
　ハイ立　立衿修理

一、威茶……一六、〇〇〇円
一、工費……二五、〇〇〇円
一、立台……　四、〇〇〇円
一、金四萬五阡圓也

これはその時の修理見積書である。

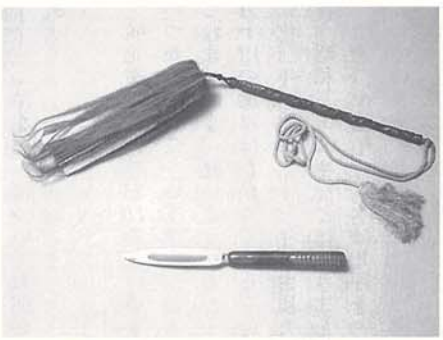
牧田氏は、源義経、楠木正成、徳川家康などの国宝・重文級の甲冑修理を手がけた職人（正倉院の馬具の修理もこの人がおこなった）で、極力古い素材をそのまま残し、古式に則った修理をされているので、素人目にも資料のもつ重みが伝わってくる。赤地羅紗の陣羽織ともども一見の価値ありである。最後に、本資料について御教示を賜った香宗我部豁志・一良両氏にこの場を借りて御礼申し上げたい。

金茶威二枚胴具足（銘重則）
〈伝香宗我部親泰所用〉



二枚胴合当理・待受

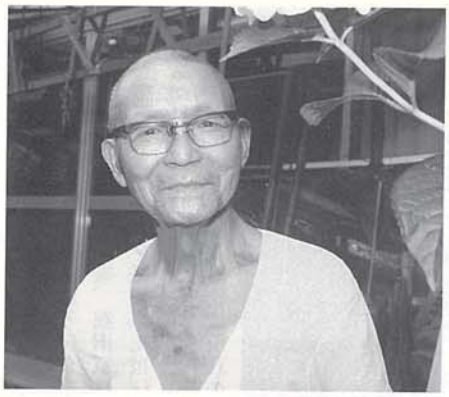
陣羽織（赤地羅紗白武田菱）
〈伝香宗我部親泰所用〉



采配・伝秀吉より拝領馬上槍（先）
〈伝香宗我部親泰所用〉

ひと 3

市川泰三さん



市川泰三さんは明治四十三年のお生まれで、今年八十四歳です。当館の資料調査員として、主に民俗調査でお世話になっています。夕暮れ時の窪川町七里に市川さんを訪ね、窪川町の民話や民具集めのことをお聞きしました。万六話などをうかがい、ワハハの笑いがとまらない、楽しいひとときでありました。（中村）

―― 市川さんは民具を数多く集めておられますが、どういうきっかけで集めるようになったのですか？

ガラクタ集めとしたものでしてね、自称「餓楽苦多庵」と言っていますよ。民具を集めるのは、歴史を消さないため。民具は、歴史の証言者やからねぇ、大事なものやと思っております。

きっかけは、窪川町が明治百年記念展を主催したときのこと、私は会から依頼され、東奔西走して民具を集めました。その返品の折り、民具の持ち主から譲ってもよいと言われたものを集めだしたのが病みつきになりましてね。民具のついでに民話も集めましたよ。なかでも窪川が生んだ民話の主人公、万六の話は臍が宿替えるね。まっこと面白い。

私は三男坊で、生まれたときに体が弱く、育たんろうということで名も付けられずに放っちょかれたそうです。家が貧乏で食うや食わずで育ったから、こんなに貧弱なわけ。けれどそれへの抵抗で雑草めいた生活で生き残っています。学歴は尋常小学校六年と高等小学校一年しか行っておりません。そこで、なんとかして学校に行きよる友達に負けんように、まず、石川啄木の歌集を写し取ったんです。それで書き癖がついたようです。

「古里の山に向かいて言うことなし
古里の山はありがたきかな」

啄木の歌は、今も口をついて出てきますよ。

―― お集めになった民具などの資料にはどのようなものがありますか？

石油ランプや地蔵さんなど、いろいろと集めましたよ。例えば、ホヤが三段に分かれている行灯があります。裸火だと明るいが、風が強いと火が消えてしまうので、だんだんホヤを重ねていく。こういう生活の知恵があったのです。ホヤには土地の権利書が貼ってあり、それには高知県知事岩崎長武と書いてあります。使われていた時代もわかるというものです。当時貴重だった紙を使い回ししていたこともね。

また、『軍用金票』というものがあります。占領地で偽金に使ったものです。軍票と呼んでいました。土地の人をだますために作られたのです。これなどは日本の罪悪史につながるものとして反省材料ですよね。

それから私は現在『洪水史』というものを書いておりますが、その洪水に関する墨書のある棟札があります。焚き付けにするというので、これは貴重なものなのでと頂いて来ています。

―― 『洪水史』についてお聞かせ下さい。

喉元過ぎて暑さ忘れるといいますね。いつかまた、こういう洪水があるやもしれませんよ。無いよう祈るが…。四万十川の洪水はわかっているもので、弘化三年、明治二十三年、台風九号に伴う昭和三十八年などにありました。

明治二十三年の洪水は九月十一日に起っています。高岡神社は五つ宮が並んでいるので「五社さん」というんですが、その「中の宮」に行くと大きな石柱が建っています。「明治二十三年洪水水位標」と書いてあります。中の宮の天井までピッタピッタと水がついたんです。洪水についてたくさんの話が残っておりますよ。遺跡もね。

この明治二十三年洪水の大惨事が起こった理由のひとつには、連年のシケ

にやられての補修にそれぞれの家が障子の貼りかえに使ったり、また、国会の開設や各校への教育勅語の配布などがあって、紙がうんと必要になり、紙の原料の楮づくりが盛んに行われ、野山を切り崩して楮をつくったということがあります。そのツケで東津野村の倉川の山が崩れて川をせき止めた。今でもその山を「つえ山」といいますよ、よくつえるからね。それが豪雨で崩れてピタッと川をせき止め、ダム状になり十二キロ奥まで水が溜まりました。そして更に豪雨が加わり、このダムが崩壊した。雨がやんで西に青空まで見えていたのに、水が突然出て、四万十川史上最大の洪水となったのです。

人間が自然をいじくり過ぎるとそのはねかえりに泣かされるようです。

――『洪水史』などをお書きになるのは、どういったお気持ちからですか？

これまでいろんな人のお世話になって生きて来た。ものを書くのは、その恩返しですね。私の書いたものが後の知恵になるなら、いたずら書きでも、それを誰かが読んでくれれば幸せだと思っております。

昔は縁側で雀が並んだように集まってよもやま話をするのが、老人の暮らしでした。今はサッシが入り、中にいる人はテレビを見ていて、外から呼んでも聞こえん。旅人を招き入れて、いろり端で話を聞くということもなくなりました。世相が変わったんですねぇ。だからこそ、昔のことを知ってもらいたいんです。

昔は一年のうちに白いまんまが食べれる日は、正月と神祭しかなかったですよ。葬式があったら白飯にありついたと喜んだもんです。人が死んだことを「とうとう誰やらが白飯になった。」というて。米一升づつ持ていて飯を炊いて、汁をかけて食べたんですよ。それで祖父はご飯に汁をかけることはさしてくれざった。逆に汁にご飯を入れるのは構わざった。汁をかけるのは葬式のときにすることやから、せられんと。

昔は葬列の松明は裸火だったから、女が水汲みといって水を担うて火を消していたものです。葬列に水汲み女が加わる風習は今も残っています。それで習慣として、「水汲み女は呼ばれん」といったものです。葬式にやることはふつうの日にやられん、今はそんなことも言われんようになってきましたが――。

今は今だけの話をしてもらったら困る。昔はこうで今はこうだと比較をしてもらいたい。メートル法で言うてもいかん時代があったわけです。尺貫法の時代がね。

――ぜひ、万六さんの話をお聞かせ下さい。

万六は神の西の地主、甲把家の下男だったといわれています。語られるものから察すると、背が高く、筋肉質らしく、強力無双で、機知に富み、「ねぢす」(へそまがり)に属する男でした。

その時分、下層階級の者は、結婚を禁止されていました。万六も結婚できなかった。そんなことで、どくれもんになったのでしょう。「どくれる」というのは、土佐の方言で、途を外す――どまぐれの訛で反骨ということやろうかねぇ。けれど、万六が反骨を向けるのは、旦那に対してだけで、奉公人同志には向けんかった。しかも、万六は暴力をふるってないですよ。「もがる」といいますが、言葉による反骨です。ほんで迷惑はかけちょらん。

ほんならここでひとつ万六の話をしてみましょうかねぇ。

ある時、旦那が「万六。高知へ行く草鞋を作っちょいてくれ。」と頼んで来た。そんで、あくる朝起きて「できたかねや」と万六に聞いた。

「なかなか旦那さん。高知へ行きゃくもんか。ようよこればぁ出来た。」と万六は長い草鞋を作っちょったと。「それがいくかや。高知へ履いて行く草鞋じゃが。」と旦那が言うと「ああ。そりゃここにある」と、ちゃんとした草鞋を出したと。

万六は、高知へ行くための草鞋を作っちょって、旦那の言葉尻を捕まえて、こういうことをやったわけです。私らに言わせると万六は実に頓知に富んだ快男児です。怒るにも怒れんユーモア人じゃったということじゃねぇ。

私らもそれを見習いたいということで、「万六会」という会をつくりました。万六会は土佐人じゃけど酒は飲まんと、万六流にどくれてやりました。あるときは作家の松谷みよ子さんや土佐民話の市原麟一郎さんが来会されたこともあった。けれど今はメンバーも歳がいって、行なっておりません。

かつて私は近親から「人に笑われん人間になれ。」と言われていました。けんど人を怒らすことはし易いけんど、笑わすことは難しいことよ。私は、こう思っております。みな泣きたい事情があるけんどなるべく朗らかに笑おうじゃないか、と。万六を見習うてね。人生標語としては「どんな暗い夜でもキット明るい朝が来る」と唱えてね。

〈研究ノート〉

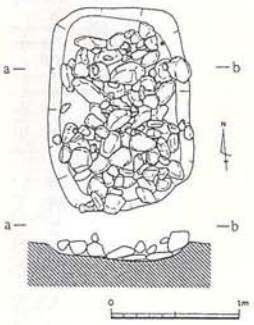
土佐の戦国考古学 ―墳墓―

岡本　桂典

日本の戦国時代の考古学の対象となるものは、城館跡や信仰、生活、経済など多岐にわたっている。近年、全国的に戦国期の遺跡が多く発掘されるようになり、その成果は文献学者からも注目されてきている。土佐においても城跡を中心に戦国期の遺跡の調査が増加してきている。ここでは、近年徐々に明らかにされてきている墳墓について私見を述べてみたい。

香美郡土佐山田町伏原に所在する伏原大塚古墳は、県内で埴輪を出土した方墳として有名な古墳である。この大塚遺跡からは、平成二年の調査で一五世紀～一六世紀の七基の墳墓が確認されている。さらに伏原大塚古墳の調査時に二八基の同時期の墳墓が確認されている。また、昭和五二年の調査時及び明治年間の県道工事の際にも多数の人骨が出土している。なお、明治期には古墳の封土と思われるものが残っていたといわれている。

さて、ここで出土した墳墓は全国的にみられる集石墓とよばれるものと土坑墓である。平成二年の調査で確認された墳墓の七基は、集石墓と考えられるものである。その内の一基からは人骨と炭化物（炭化材）が出土しており、墓は火葬墓と考えられている。人骨には、人為的な力が加わり変化を生じたものがある。これは、火葬施設（火葬場）において集骨時に加えられたものと考えられる。さらに、炭化材が床面から出土していることを考えれば本墳墓は、火葬施設を併用した火葬墓とも考えられる。また、本墳墓の集石には五輪塔の一部を破砕した礫が使用されている。墳墓標識でもある五輪塔の一部が集石に再利用されている。これは五輪塔が墳墓標識として墳墓を造った人には理解されていなかったことを示すものであろうか。この墳墓の他に八〇個の集石を用いた墳墓がある。この墳墓の土坑は、土坑の一部分が段上に突出している。これも火葬施設を併用した集石墓でないかと考えられる。



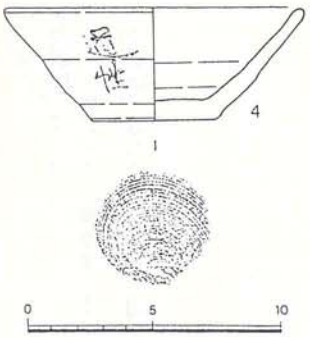
火葬施設を併用した火葬墓（『伏原大塚古墳』より）

次に、伏原大塚古墳の調査時に確認された墳墓二八基についてみてみたい。

二八基の墳墓は、集石墓と土坑墓に分類できる。集石墓は、①集石のみのもの、②集石をもち土坑をもつものの二つに分類できる。この墳墓群からは県内初例の墳墓出土の墨書土器と青銅製の柄香炉が出土している。青銅製の柄香炉は灰が残っており、葬送儀礼に使用されたことが想像される。墳墓において葬送儀礼が行われたとすれば堂などの遺構の存在も想定できる。

また、墨書土器にみられる人名「道性」は法名と考えられ、これを聖と考えるかは今後の課題であろう。

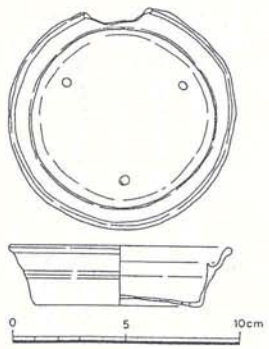
この遺跡の両者の墳墓は、同一地域に造営されたもので、古墳の墳丘を利用して営まれたものと思われる。墳墓に隣接した集落跡も確認されており、山田城跡を中心とした戦国期の城下町に関わる墳墓群であると思われる。なお、集落跡と墳墓の間には、溝跡が確認されており、溝により区画されていたと考えられる。



墨書土器（『伏原大塚古墳』より）

当墳墓には火葬墓と土坑墓の両者が存在しており、火葬場も併設されている。埋葬された人々が、火葬された人と土葬された二者に分けられ、これは階層と葬法の関連を示すものであろう。

『長宗我部地検帳』をみると当地は「西高ソトハノ北」とある。そして現在の字名にも「高ソトバノ下」という地名が残っている。これは「ソトバ」すなわち「卒塔婆」を意味するもので、墓地を指している。当遺跡が、広い範囲にわたり墓地空間として利用されていたことが推測される。さらに、墳墓の営まれた当地には、隣接して市の字名が残っており、城下町における市と墳墓の位置の関係を知ることのできるものである。この地は城下町における聖なる空間であったのである。



柄香炉（『伏原大塚古墳』より）

本棚

「高知県定置網漁業史」

岡林　正十郎著

近年、全国的に海の文化についての文献が、相次いで出版されている。その中にあって、本書はひとつの地域における一漁法の発達史を見据えた論稿であり、異彩を放っている。

長門国(山口県)や愛媛県からの技術の導入や、北海道式の網をもとに開発された土佐式落網について詳細な記述がなされ、高知県における大敷網の発達史が構築されている。漁法や漁具の他、当時の生々しい漁場紛争なども取り上げられている。他の漁についてもこうした研究が蓄積されれば、当県の漁業の全体像が見えてくるに違いない。

本書を生み出すために、岡林氏は明治前期からの県内で発行された新聞記事に目を通し、大敷網に関する記事をさがすといった地道な作業を積み重ねている。末尾の聞き取り者名簿からは、同氏が漁村をたずね歩き、いかに多くの人たちの声に耳を傾けたかがわかる。

また、岡林氏は本書をはじめとする業績によって、今年度の平尾学術奨励賞を受賞された。「名もない庶民の代弁者である」という、受賞式での同氏の言葉は、研究における同氏の立場を物語っており、感銘を与えるものであった。

(中村淳子)

歴民スポット③
岡豊山　遊具広場

まだまだ隠れた名所の多い岡豊山歴史公園。そのうちの一つは、遊具広場でしょう。すべり台、輪くぐり、縄のトンネル、ターザンごっこ（仮称）など八つのアスレチック・コースが君を待っています。もう体が若くない彼・彼女はいくつできるか試してみるのも一興。ちなみに私は（31才）鉄棒渡りでぶら下がったまま動けなくなってしまいました……。近くの歌の書いてある椅子も楽しいよ。でも岡豊山名物のムカデには気をつけて……。（梅野）

長宗我部氏の城―岡豊城跡―

岡豊城跡は、当館のある岡豊山に位置する土佐を代表する中世の山城である。岡豊城跡というと、岡豊山山頂部付近、すなわち城の中心部と一般的に理解されているが、城跡の存在する岡豊山全体が城跡の範囲である。岡豊城跡の発掘調査は、六ケ年にわたり行なわれ、山頂部の詰とこれを取り囲む二ノ段、三ノ段、四ノ段の調査が行なわれ、貴重な遺構が多く発掘された。

さて、国道三三号線より館にいたる道路を登ると第三カーブで竪堀の断面をみることができる。城の中心部は、館の建物入口より徒歩で、三分ほどのところにあり、ここより二ノ段に登ることができる。ここからは、国分寺、土佐国府跡などを望むことができる。二ノ段からは、建物の遺構は発掘されていないが、二ノ段をとりかこむ土塁が確認されている。詰と二ノ段の間には、南北に走る堀切があり、そこに天水を利用した井戸跡が残っている。詰と三ノ段からは、礎石をもつ建物跡や地鎮の遺構、土塁、土塁の中に築かれた石垣、詰と三ノ段の通路として利用された階段状遺構などが発掘されている。これらは復元されており、中世城跡を実際に見て歩くことができる。また、詰から東南部の厩床曲輪の斜面には竪堀があり、厩床の東部には、堀切が残っており城の防禦の様子を知ることができる。

本城跡からは、瓦や懸仏、多くの土師質土器や陶磁器、武器などが出土している。特に、元親が土佐を平定した天正三年（一五七五）銘の年号を刻した瓦が出土しており、瓦は、詰の建物に葺かれたものと考えられる。この瓦には「おこう之御□」とあり、本城がおこう城と呼ばれていたことも可能性として考えられる。（岡本　桂典）

岡豊城跡復元された三ノ段

10～12月の催し物

〔企画展〕

10.15～11.23	四国の戦国群像 －元親の時代－	土佐の戦国大名長宗我部元親と様々な形で彼に関わった人々の遺品を一堂に集め四国の戦国時代を描きます。

〔講演会〕（午後２時～４時。聴講無料。葉書でお申込み下さい。定員100名になり次第締切）

11. 5(土)	長宗我部元親と一領具足	下村　效 先生（國學院栃木短期大学）

〔子ども歴史教室〕　（当日受付。定員30名）

10. 8(土)	土佐の古代を歩く	AM10時　国分寺集合。徒歩にて国府跡周辺をまわります。
11.12(土)	岡豊城跡たんけん	AM10時　館入口集合。中世の山城の構造などを実際にみて探険します。

〔講座〕　（午後２時～４時。当日受付。聴講無料。定員100名）

12.17(土)	土佐の民権運動・１	下村　公彦（当館学芸課長）

〔企画コーナー〕

12. 1(木)～	吉本家資料	平成６年度に寄贈された60余点の吉本家資料の中から国学者吉本虫雄とその子孫の遺品を展示します。

〔歴民館日録〕

月日	出来事
平成六年	
七月九日	子ども歴史教室「服のうつりかわり」
七月三〇日	企画展「翁・尉・男・女・霊・鬼―土佐・能面の展開―」開幕
八月二～七日	博物館実習
八月三日	夏休み子供教室
八月一三日	子ども歴史教室「紙芝居『ジョン万次郎』」
八月二〇日	企画展講演会
九月一～七日	博物館実習
九月四日	企画展閉幕
九月一〇日	子ども歴史教室「ビデオ映画会」
九月一七日	講座「土佐の海の民俗」

出版物のご案内

3月刊行　「研究紀要」第3号
新発見の銅剣特集号。岡本健児氏と当館の岡本桂典による「高知県香美郡野市町兎田八幡宮と絵画をもつ銅剣」を掲載。
（B5版　五二頁　定価五〇〇円）

「ものがたり考古学―土佐国辺路五十年―」
高知新聞に岡本健児氏が連載した「高知・ひとの歴史―小・中学生の考古学―」全百回を一部書き改め、考古学の立場から高知県の歴史をわかりやすく紹介。野市町兎田八幡宮の絵画銅剣について新らたに書き下ろしている。子どもから大人まで楽しめる高知県の考古学入門書。
（A5版　334頁　定価　二、八〇〇円）

「土佐　歴史の遺品―」
土佐の歴史上の遺品・名勝を解説付きで、文庫本にしたもの、図版オールカラー。
（A6版　164頁　定価　九八〇円）

〈ひとこと〉

今年の七月は、水不足となりました。岡豊山の草花も、雨をまちのぞんでいました。七月末の台風でやっと一息。昔の人々は水に対して畏怖や畏敬の念をもっていました。その昔の人々の知恵を残していきたいものです。（岡本）

四万十川で船づくり等を調査しました。昔より鮎が少なくなったという声をあちこちでうかがいました。川の汚れはみえないところで想像以上に進んでいるのです。（中村）

特別展『四国の戦国群像―元親の時代―』の準備作業に大わらわです。最近、夢の中に元親が出てきて困っています。（ウーム）（野本）

「服のうつりかわり」では身近なことをテーマにとり上げてみましたが、私自身も知らなかったことを学ぶ機会となりました。（曽我）

平成六年一〇月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783 南国市岡豊町八幡1099―1
TEL　0888(62)2211
FAX　0888(62)2110
開館時間　午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日）12月28日～1月4日
入館料　一般・400円／中高校生・150円／小学生・50円
団体（20人以上）割引きあり
（療育手帳・身体障害者（1・2級）手帳所持者とその介護者、高知県長寿手帳所持者は無料。毎月第2土曜日とその翌日の日曜日、こどもの日、文化の日、勤労感謝の日は小中高生は無料）
印刷・川北印刷株式会社